1

5月の上旬、世間では連休に浮かれた人たちが、車や電車でどこそこへと出かけて行く。無論、大学生たる僕も電車に乗って家から離れている。もっとも、目的地は心躍る観光地ではなく、アルバイト先のレストランだが。午前9時、出勤を終えると、仕込みの手伝いをしようとしたが、店長からゴミを出してくるように言われた。連休中である上、店が明日は休みになるため、昨日は特に客の入りが多く、閉店の作業もいつもより杜撰だった。一度店のゴミ捨て場に行ってゴミを回収し、その後共用のゴミ捨て場に持っていく単純な作業すら忘れるほど忙しかったのだ。

裏口から出て、店のゴミ捨て場に向かうと、そこにはにスーツケースが置かれていた。というよりは、放置されていた。ひとまず店内に戻って田嶋先輩を呼ぶ。僕より長くこの店で働いており、こういうときに頼りになる人だ。

「田嶋先輩、店の裏にスーツケースがあったんですけど、どうします？」

「えー。お客様の忘れものじゃない？一応休憩室の忘れもの置き場で預かっておいて、連絡きたら渡しといて」

裏口から出てすぐ、つまりキッチンの反対側にある休憩室に置いて、さて仕事に戻ろうかというとき、エプロンがスーツケースの方へと引っ張られた。見ると、チャックについたキーホルダーが引っかかっているらしい。少し引っ張ってみたが、なかなか取れそうにない。思い切り引っ張って無理やり引き離すと、勢い余ってスーツケースのチャックを三分の一ほど開いてしまった。そのとき、中から紙が一枚ひらひらと落ちてきた。

『この手紙が誰かの目に入っているなら幸いだ。来る五月五日、レストラン「モーニング」は爆破される。一年前のその日に犯した罪を償うときが来たと思ってくれて構わない』

差出人の名前は無かった。イタズラだろうと思っていたが、チェーン店でもないこの店が名指しされていること、明日爆破されるという内容、そしてスーツケースの中に誰がどう見ても爆弾としか捉えられないモノを見つけたことから、先輩と店長に相談することに

した。紙を見た瞬間、店長は震え上がった。まさか本当に爆破されるのが怖いのだろうか。

「ひとまず、警察に届けた方がいいと思います。」田嶋先輩も僕の提案に首を縦に振っている。後は誰が警察に届けるべきかを決めるだけだと思っていたが、店長が口を挟んだ。

「警察には届けるな。爆破予告が届いた店なんて客足が遠のく。第一、誰かのイタズラだろう。こんなことで警察の手を煩わせるわけにはいかない」

「じゃあもしこれが本当に爆弾だったらどうするんですか。場合によっては僕らもただじゃ済まないです」

しかし、店長は僕の反論を待ってましたと言わんばかりに、声色を上げて話し始めた。

「そう、それにその手紙には爆弾が一つだけとは書かれていない。もしかしたら、店に他の爆弾がこっそり仕掛けられている可能性だってある。警察に任せてたら時間かかるでしょ？タイムリミットは明日まで。僕らがやらないといけないよね。頼まれてくれる？」

結局押し切られて、スーツケースに関わった僕と先輩で隠された爆弾を探すことになってしまった。

ひとまず店の裏の監視カメラを見てみたが、ゴミ捨て場が少ししか映っていない。それでもスーツケースが置かれた場面は映っていた。置かれた時間は午前2時。映像が不鮮明な上、犯人はフードを被っていたため男女の区別すらつかない。しかし、右手が一瞬きらりと光を放った。光を反射するアクセサリーを身につけていたことになる。

普段の業務をする合間を縫って、店の中に他の爆弾がないかを調べ回った。休憩室の棚を調べていると、一つのファイルを落としてしまった。店の売上など、経営に関する書類がファイリングされているもので、店長が管理している。開いた状態で落ちてきたので、一番上の書類が見えてしまった。店に保険がかけられている旨が書かれていた。人災までカバーできるプランだった。隠された爆弾のこととといい、うちの店長も意外と用心深いものである。しかしそれ以外には、植木鉢の中、換気扇の中、冷蔵庫の裏などめぼしい場所には何も無かった。

僕より長くここで働いている田嶋先輩は、従業員から店長の印象をそれとなく聞いてきたらしい。店や店長が狙われる原因から調べようというのだ。その結果、面白いことが分かった。この店は5年前にできたこの辺りにしては新しい店だが、当時は今より客足が多く、仕事も大変だったらしい。木下さんという従業員はかなり無理をしていたようで、よく体調を崩していた。そして、1年前までこの状況は続いてしまった。その日とその少し前に、オープニングスタッフである木下織さんと原田轍さんが辞めている。

木下織さんが辞める三ヶ月前に田嶋先輩はこの店で働き始めた。先輩が研修中に仕事を教わっていたが、面倒見が良い人だったそうだ。木下さんが去る直前、先輩が最後に見た彼女の顔はひどく青くて痩せこけていて、作った営業スマイルが見ていて痛々しかったと話してくれた。

16時の休憩のとき、店長にこのことを問い詰めた。

「そうか、誰から聞いた。」

「水園さんです。彼女もオープニングスタッフなんですよね？」

「そうか。本当に彼女には無理をさせてしまったな。」

ビンゴだった。彼は下積みの後、夢であった自分の店を持った。そこでオープニングスタッフとして高校の同級生を何人か誘った。しかし、予想外に客入りが多く、開業資金の返済もあったため、当時は今よりもっと過酷な労働環境だったらしい。そして、せっかく叶った店長の夢を潰さないために、皆死に物狂いで働いた。劣悪な労働環境を世間に知られたくなかったため、今回は頑なに警察の介入を拒んだ。店長はあの手紙を見てから狙われているのは自分で、犯人はオープニングスタッフの誰かだと思っていたらしい。

オープニングスタッフは店長含めて四人。木下織、水園香織、原田徹、店長。このうち怪しいのは、右手にアクセサリーを身につけている水園さんと、既に辞めていて連絡がつかない木下さんと原田さんだ。

その日の夜、裏口から店を出た後、金髪の男が近くにいるのに気がついた。右手に巻かれた腕時計に自然と目が移る。

「申し訳ありません、ラストオーダーの時間を過ぎております」
「いや、食べにきたわけじゃないんだ。君、ここでバイトしてるのか？」
「ええ、まあ」
「そうか。仕事は辛くないか？大変じゃないか？」
「仕事の紹介ならお断りします。これ以上働くと扶養外れるし、この仕事気に入っているので」
「そうか。好きならいいんだ。ただし、少しでも無理だと思ったらすぐにやめろ。限界まで仕事にしがみつこうとすると、手遅れになる。昔はここも酷かったそうじゃないか」
「昔ここで何があったか知っているのですか？」
思わぬところから犯人の手がかりが掴めそうだ。男は語り始めた。
「昔、この店ができたばかりの頃の話だな。明らかに尋常じゃない量の仕事をたった四人でやっていた。バイトを募集しても、入りが悪かったからそうするしか無かった。そしてそのオーバーワークの結果、死人が出た」
「死人？」
衝撃だった。オープニングスタッフは二人を残して全員あったことがある。つまり亡くなったのは、木下さんか原田さんのどちらかだ。しかし、そんなこと聞いたことが無い。この男が言っていることは果たして真実なのか？
「まあ、なんだ、呼び止めて悪かった」
男は僕の後ろを確認すると、そう言い残して、駅の方へ去っていった。そのとき、後ろから水園さんが駆けてきた。
「なんで原田がここに？」
「あの人が原田さんなんですか？」
「さっき話していたよね？昔この店で死人がでたことはオープニングスタッフ組しか知らない。確か、木下が亡くなったと連絡が入ったのは去年の五月六日だった」
これでほぼ原田さんが犯人だと確定した。というより、容疑者が他にいない。しかし、

どこか胸に拭えない違和感が残る。

「どっちに行った？」

「駅です」

「追いかけるよ」

僕の胸のつっかえを知らぬ水園さんの勢いに連れられて、二人で駅に駆け出した。

電車によっては終電が出てしまうような時間、駅のコンコースはピーク時までとはいえないものの、相応の人口密度であった。この中から、原田さんを探し出さなければならないと思うと気が滅入る。爪先立ちになって人混みに目線をやる。動く頭の隙間に、記憶に新しい金髪を見つけた。

「いた。あそこです」

声が大きかったのか周りにいた人たちが一瞬どよめいた。そして、原田さんにも気付かれてしまった。彼がフードをかぶって改札まで走って行くのが見えた。その動きが分かったのか、水園さんが人波を掻き分けて追いかける。僕は店長に原田さんがいたこと、駅まで逃げてきていることを電話で話しながら、その後を追いかけた。原田さんは逃げながら、周りの人や物を僕らの前に突き飛ばして障害物にした。飛ばされた人を受け止め、物を避けながら片手チョップの体勢で人波を掻き分ける。このままではらちが空かない。そのとき後ろから

「原田はどこだ」と店長の声が聞こえてきた。

「追いかけるので、後ろの人を頼みます」

と言って、流れてくる人を受け止めるのを後ろに任せて原田さんたちを追いかけた。けれど、追いつく前に二人の後ろ姿はどこかの路線のホームまで吸い込まれて行った。

僕がホームに繋がる階段を駆け上がり、ホームの端にいた二人に追いついた。

「何で逃げたんですか」

「急に追いかけられたら、誰だって怖いさ」

「嘘つかないでください。原田さんなんでしょ？スーツケースに爆弾と手紙入れて、ゴミ

捨て場に置いたのは。だから逃げたんだ」

「やってねえよ。店が爆破されようと、俺にはもう関係のないこと。」

「原田さんには関係なくても、木下さんには関係がある」

「知っているのか、木下のことを」

「高校からの仲間だと聞いてます。彼女が過労で亡くなったから、店のこと恨んでるんだ」

「それで？仲の良い同僚を無下にされたくらいで恨んだりしない」

感じていた違和感はそれだ。原田さんの言う通り、ただの過労死なら、多少店や店長を恨めど、店を爆破するなどという奇行には走らない。

「何か、他の理由があるんですよね」

「他も何もない。だって俺はやってないんだからな」

話しているうちに、関係者全員が駅のホームに集まった。店長は、原田さんを見つけた途端、勢いよく掴みかかった。

「貴様、よくもこんなことをしてくれたな」

流石に暴力はいけないと、僕と水園さんで彼を引き剥がすと、原田さんは続けた。

「だから、俺じゃないって言ってるだろ。それとも、何か決定的な証拠でもあるのか？」

「あるさ。爆破する日をわざわざ五月五日にするなんてこと、お前しかしない」

「そうかな？俺が辞めたのは一年も前だぜ。どうせやるならすぐ実行するね」

「五月五日は、木下の命日だろ。お前は明日を誰よりも待っていたんだ」

原田さんは店長の発言を待ってましたと言わんばかりに、声色を上げて話し始めた。

「俺が皆に連絡したのは五月六日だぜ？なんで五日に亡くなったなんて言ったんだ？」

「そうだ、六日だよ六日。ちょっと日付けを間違えただけで揚げ足取りやがって。間違えて悪かったな」

「何で、一日間違えたんだ？俺の中では織が死んだのは六日だが、あんたの中では五日だった」

原田さんは鋭い剣幕で吐き捨てた。店長は呆れた口調で続ける。

「なあ、もういいだろ。そんなに俺が日付けを間違えたのが気に食わなかったのか。悪かったよ」

「いいや、何もよくない。俺が織が死んでるのを見つけたのは六日で、あんたは五日だったんじゃないか？」

「妄想もいい加減にしろ。お前の与太話に付き合っている時間はない」

「これを見ても、そう言えるか」

原田さんが取り出したのは、何枚かの借用書だった。どれも借りた人の名義は、木下織だ。

「お前は店の開業資金を集めるのに困っていた。銀行に断られたんだろうな。そこで織の名前を使って、闇金から金を借りた。必ず自分の金で返すと約束してな。だが金利が高すぎてお前の首が回らなくなった。そこで、織に多額の生命保険をかけて、事故に見せかけて殺したんだ。」

そう言って、原田さんは保険の契約書を出した。金額は全て降りれば５０００万に届くだろうかという大金だった。

「お前は織に少しづつ毒か何かを飲ませて衰弱させた。過労に見せかけるためだ。そして去年の五月五日、アパートで待ち伏せて締め殺した。自殺に見せかけたんだ」

「バカが。そんなんで保険金が降りてたまるか。」

「降りたんだよ。精神障害による自殺なら保険金は降りるからな。だが保険会社との交渉に時間がかかった。そこで膨らんだ利子を返すために、今度は他の従業員を巻き込むことにしたんだ」

他の皆が目を見合わせた。誰も事件に巻き込まれているなんて実感はないからだ。そんな僕らをお構いなしに、原田さんは続ける。

「あんたは店と従業員に保険をかけた。それで従業員の命を奪い、あんたは借金を返そうとした。」

「そんなことしたら、大事な店が潰れてしまうじゃないか。そこまで俺もバカじゃない」

「だから爆弾は威力を小さいものにした。店の被害を最小限にするためだ。店の保険は、念には念を入れてってところか」

「そんなもの入った覚えはない」

「あの、僕見ました。今日の昼に休憩室のファイルに挟んであったやつ」

「私も見たよ。つい最近ね。そのファイル。保険に入ってた」

僕と水園さんのフォローで、少なくとも僕らを手にかけようとしたことは決定的になった。

「お前たちは、今日死ぬ予定だったんだ。爆弾が入ったスーツケースを休憩室に置かせて、閉店際のタイミングで爆破するつもりだった」

観念したのか、店長は自白した。けれど、分からないことがある。

「スーツケースを置いたのは原田さんなんですか？」

「そうだ」

「一体どうやってスーツケースを店長から受け取ったんですか？」

「この店の近くにスーツケースを運ぶ怪しいバイトがあった。嫌な予感がして、それに応募したらビンゴだったよ。朝香は闇バイトを使って爆弾を店に仕掛けようとしたらしい。駅のコインロッカーからスーツケースを取り出したタイミングで、水園に連絡した」

朝香は店長の苗字だ。オープニングスタッフ組は店長を苗字で呼ぶ。

「連絡もらったときは驚いたよ。私と原田で一芝居打って、皆を店から出すことにした」

水園さんは続けた。僕が気づかなくても、水園さんが皆を連れて原田さんを追いかける体で店から出すつもりだったらしい。

「じゃあ、駅まで逃げたのはどうしてですか？」

原田さんは店長を指差しながら答えた。

「こいつを警察に突き出すためだ。駅のホームなら逃げ場は無い。罪を償うときがきたんだよ」

店長はもう何も言わなかった。逃げられないと踏んだのだろう。

「さ、大学生たちはもう帰りな。水園もありがとうな」

原田さんはそう言って、手をヒラヒラと振っている。言われた通り帰ろうとしたとき、田嶋先輩が

「まだ、帰れません」

と言った。

「いや、警察に突き出すのは俺がやっとくから、早く帰れって」

「じゃあ付き添います」

「遅い時間まで付き合わせられないよ」

「じゃあ店長を殺さないでください」

全員が息を呑んだ。

「何で俺がそんなことしなきゃいけないんだ。ただの同級生だぜ？」

「生前、木下さんから聞きました。お二人は付き合っていたそうですね。一生を誓った相手の命を奪われたら、殺したいくらい店長を恨むのは当然です」

田嶋先輩と話す原田さんの手は、店長を捕らえて話さない。そのままじりじりとホームの淵に進んでいく。終電まであと2分を切った。僕は皆から少し離れて、警察を呼んだ。

「原田」

水園さんが語りかける。

「あんたはこのまま、朝香と死ぬつもりなの？」

少し間を置いて、原田さんは答えた。

「そうだ。織は俺の生きる理由だった。もう理由は無い。せめて仇を打って、終わりにするよ」

「そんなの仇打ちでもなんでもない。あんたは、朝香ですら叶えた自分の夢を諦めるつもり？」

「こいつみたいに、人の命を奪う夢などいらない」

「あんた、検事になるんだろ。木下からよく聞いたよ。毎日毎日、仕事のあとめちゃめちゃに勉強してるんだって。私が少しでも頑張って、支えるんだって。応援してくれてたんだよ。その夢を、木下の残滓ごと捨てるんだ」

「……できない」

原田さんは店長をホームの反対側に向かって突き放した。

「織と一緒にみた夢を捨てるなんて、俺にはできない」

原田さんの目に一瞬きらりと光が反射した。その光は頬を伝って、ホームに落ちた。

「そうか、そこまで木下のことを大切にしていたんだな」

店長が口を開いた。だが、今更何を言うといった顔で皆見つめている。そして、店長はジャケットの奥から包丁を取り出し、原田さんに突き刺した。

「だったらあわせてやるよ」

今度はホームに赤い光が落ちる。残る三人で店長を取り押さえた。階段からは警察が駆け上がってくる。